

文学・芸術

波多野華涯(1863-1944)は文人画家として名を残す。2023年に広島でG7サミットが開かれたおり、実務夕食会の背景にはその六曲一双の大作銀屏風《蘭竹図》(1924)が飾られた。画詩には、元の張渥はじめ、元・明の中国文人たちの蘭竹の詩に添えて、自身の作も秀抜な墨筆で残され、卓越した女流漢詩人だった力量が証される。2024年には岡山県立美術館で没後80年の回顧展が開催された。ご子孫にあたる小田切マリ様が「華涯文庫」代表として顕彰に努めておられる。華涯の事績を伺っての私的な小発見を、幾つか備忘録に綴る。

先述の《蘭竹図》は1922年に英国皇太子が厳島を訪れた際に、岩惣旅館において「御台覧」に供される。その翌年・大正13(1923)年作には《向日葵図》が知られるが、これにはフィンセント・ファン・ゴッホの感化が明らかな。山本小彌太経由で住友家に入ったゴッホの《向日葵》は雑誌『白樺』口絵にも原色版が掲載され、同油彩は白樺美術館で1921年に展示されるが、英国皇太子は芦屋の住友邸も訪れており、華涯はその間の事情を知り得た筈。

同年、黒田重太郎が『ブ・ン・ゴオグ』(1921)伝を出版するが、これは上海千ダニズムの随筆家・漫画家の豊子愷が中国語に簡訳しており、そこでゴッホを「文人画家」と評価している。ドイツのクルト・グラマーも富岡鉄斎を京都に訪ねた最初の西洋人として知られるが、その持論は、泰西の表現主義は東洋の文人画の水墨による自我表現に通じる、との認識だった。

近代には衰退した、と当事者たちも自覚していた文人画だが、その伝統は、密かに欧州や中国大陸で、あらたな評価を得ていた。そうした隠された文脈も仄かに視野に入ってくる。

同時期、岡山に屈を構えた華涯は、《西洋草花図》連作(1925)を描いている。赤い鶏頭の花が咲き誇る図を含むが、小田切様は倉敷の大原美術館で作品蒐集に

波多野華涯と濱口陽三と濱口儀兵衛のことども余話

尽力していた児島虎次郎との関係を示唆された。これは誠に図星で、私見では児島からの感化も歴然とする。というのも、鶏頭の花を背景にチマ・チョゴリの少女が佇む児島の油彩画《秋》(1919)は、パリのサロン・ドートンヌに入賞し、洋画家はそれを敷衍した作品を倉敷でも披露していた。

古備・備中は浦上玉堂を想起するまでもなく、文人趣味や漢詩の素養が濃厚に残る土地。同郷の竹久夢二が自らの唯一の絵の先生と呼んだ服部全三郎も、他ならぬ華涯の弟子だった。

『華涯書簡集：門人濱口梧洞との往復書簡』(文学通信、2019)には、さらに驚かされた。濱口梧洞こと濱口儀兵衛といえば、「稲むらの火」の濱口儀兵衛(1820-1885)がただちに脳裏を過る。安政地震の折、津波の来襲を予見して高台の稲穂に火を放ち、沿岸の民を導いて救った人物で、近年、再評価される。その逸話を小泉八雲こと Lafcadio Hearnが英文で綴り、それゆえ tsunami は英語の語彙となった。一族は銚子のヤマサ醤油の創業者、その十代目の曾孫が同名の儀兵衛＝梧洞(1874-1962)。

これは当方の無知を晒すだけだが、その梧洞の三男が、1930年にパリに渡った銅版画家、濱口陽三(1909-2000)に他ならない。陽三は山本鼎から長谷川潔、恩地孝四郎、永瀬義郎らに受け継がれる創作版画の系譜の藝術家。敗戦後に再渡欧し、多色刷りメソチント技法の開発により世界の版画藝術を刷新した。妻であった南桂子(1911-2004)も谷川俊太郎ほかの詩集への挿絵や装画でも著名で人気を博している。——洋の東西の藝術交流の常識を刷新する、知られざる脈絡が発掘を待って眠っていた。

*『没後八十年波多野華涯——筆と生きた女性』岡山県立美術館、2024年、『濱口陽三と波多野華涯——句い立つ黒と黒』ミュゼ濱口陽三・ヤマサコレクション25周年記念(1)に取材した。

稲賀繁美
国際日本文化研究センター
総合研究大学院大学名誉教授

島崎藤村
架橋す
「役」の思想は、
中山弘明



は、なお精緻な分析が求められようが、近年光が当たりつつある「昭和の藤村」を論ずる重要な視座として、今後議論を呼ぶことになるだろう。考えてみれば、島崎藤村と

代消費の主体へと編成され、自ら性規範を規定してしまつた問題への批評性が視野に入つてくるだろう。小平は、本書を通して評者の頭をよぎった論ずる演劇や医療の言説だ夢想である。
(徳島文理大学教授)

ウェッキ
レジヨ・エミリアのアートと創造性
四〇〇 北大路書房
一五〇〇 福村出版
一八〇〇 論創社
四〇〇〇 同
高坂康雅
千野境子
周星
恋愛と結婚の心理学
奇才・勝田重太郎の生涯
現代中国のトイ革命

思

考

の

隔

京